

高山の文化を高めた人々

57

飛驒の民俗を調査研究 山田白馬

田中 彰



山田白馬

鳥毛打や一之宮町の神代踊などを紹介し、「飛驒の歌謡と民俗」(ひだ

白馬は高山市天性寺町の生まれで、本名を鎌太郎という。農村各地の失われてゆく飛驒の歌謡と民俗を、大正中期から昭和初期にかけて採録した民俗研究家である。

その中で、「頬かむり小屋の研究」という調査報告を『ひだびと三年三号〜四年五号』にかけ八回連載した。頬かむり小屋とは、若者が一般社会人として集落に認められ、大人としての心構えを学ぶ重要な農村の制度であった。小屋の炉の記述では、独身の者が集う小屋は炉の形が三角でないと山の神に障るので、父母

と伴の三辺にしているという。この小屋の目的は、若者に村一人前の男としての教養を身につけさせることにある。夜ばいの習俗も習ったようだ。

白馬は高山市丹生川町や下呂市小坂町の民俗に造詣が深く、「山の子の勧進行事」と小屋での「一升喰い」について紹介している。山の子の勧進行事は益田地方で特に盛んであり、白馬は父に連れられて見た、下呂市小坂町の青竹を火にくべる爆音や、若者の覆面のいでたちの山の子行事は印象深かった、と記している。

一方、小屋の振舞に一升喰いという「餅鏡」を祝う習俗があった。十五歳になった新加盟者に仲間との誓約をさせ、餅をついて山神の座に飾り、後の直会でもっと食べらっしゃいと強制するもので、食べきれず「喰い余す」ことが豊年につながるという儀礼があった。

白馬は、昭和十八年に発足した「郷土芸能研究会」に関



孫のりりさんが大事にしている
白馬愛用の杖(一之宮町奥で)

びと八年十号)では百四十三頁にわたり、農作業の唄などを紹介している。麦踏唄、桑もり唄、苗採唄、田植歌、田之草採唄、焼畠仕(なぎし)唄、歩荷唄、蕨根叩唄、糸挽唄、機織唄、めでた、鯉の滝のほりなど、幅広い。

このあとがきで白馬は「たった一唄を聞くために、二度三度、一つの習俗に目鼻をつけ得るまでに年を重ねて数回、同じ村を、同じ古老を訪ねた。―中略― 今日、悪態にも言われる遺風。それも当代の社会制度の上には無くてはならない生活様式であり、また信仰であり、風習であった事も多かるう。」と述べている。

白馬という人はどんな人物であったのか。孫の山田るり子さんと娘の非魚さんは「祖父はいつも着物を着て、物静かで穏やか、温厚であった。自然が好きで、子どもが生まれるたびに、俳句と短歌を作ってもらった。」と語っている。

白馬は斐太中学を卒業後、飛驒銀行(現十六銀行)に勤め、退職後は、様々な事業を営んだが、成功も失敗もあり、波瀾万丈の人生であった。昭和四十五年頃、白馬は高山市天性寺町から一之宮町「奥」の在所に転居した。白馬の子は男二人、女四人で、一之宮町「奥」の場所は、白馬の二男である山田八束が跡をとり、現在は孫の山田るり子さんが住む。

白馬は、飛驒短歌会の初年に参加していて、昭和二十一年発行の『飛驒短歌会報』第二号に次の歌が掲載される。「寂び妻が求め置きたる闇酒を鳩にか移す雪夜閑けき」(鳩は酒を爛する容器)

明治二十五年(一八九二)十一月十四日生

昭和五十年(一九七五)十一月九日没

丹生川町の正宗寺十五世山田霊林(明治二十二〜昭和五十四)は白馬の兄。この兄は十歳の時、正宗寺に入って得度し、曹洞宗宗務庁教学部長を経て昭和三十九年駒沢大学総長、五十年から永平寺の七十五世貫主となっている。